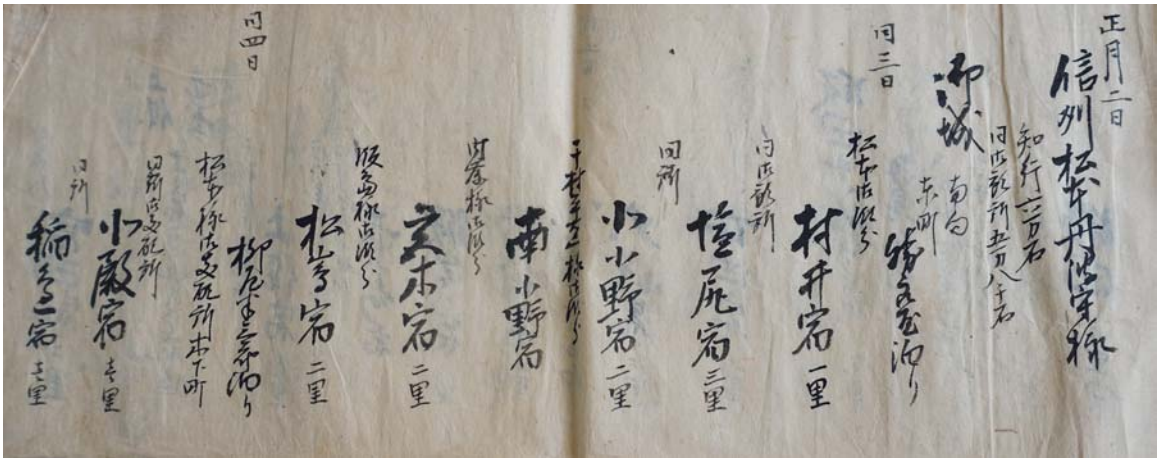
ふるさと安曇野
きのう きょう あした
No.21　2020.2.15

旅と土産

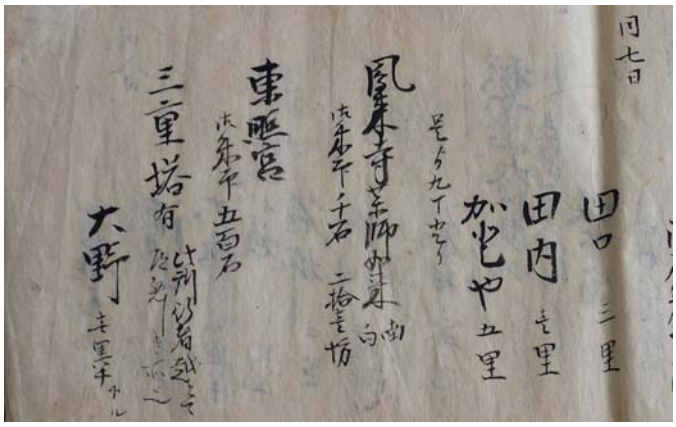
江戸末期から明治初期の旅

1　安曇野からの旅～伊勢参り～

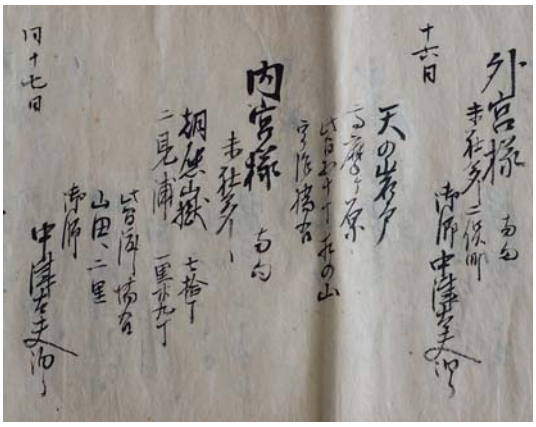
江戸時代も将軍が何代がかわり、世の中も落ち着いてくると文人たちの旅が始まり、やがて庶民への旅も始まっていく。安曇野から外へ出て行く旅は、ほとんどが寺社参詣の旅で、展示した平林仁野右衛門も伊勢参詣を主目的とし、京大阪・堺・金毘羅まで足を延ばしている。かつてはさまざまな講があって、伊勢講もその一つであった。仁野右衛門の往路は三州街道を進みあちこち参詣しながら伊勢に到着する。安曇野から伊勢参りをする折にはこの行程がよくつかわれた。この道中の記録は写真のようなもので、参詣した寺社の向きを「南向」「東向」などと書いている。また、境内に祭られている神々の名や建物の大きさなども書かれており、それぞれの寺社の特色を記録しようとしていたことがわかる。また、出発地から到着地までのおよその距離も記録されており、次に行く人のためなのか、もう一度自分が行くあるいは身近な人が行くときの参考のためなのか。ほかの記録にも同様の書き込みがあるので、当時の旅の記録の仕方の一つの形式だったのか。双方が考えられる。



正月２日出発。松本東町に一泊し、３日いよいよ伊勢を目指す。



途中、鳳来寺などにも参詣している。



15 日、外宮に参拝。御師中津太夫の家に宿泊。
16 日内宮に参拝している。

平林仁野右衛門は伊勢だけでなく、出たついでにいろいろなところを回ってこようということであろう、金毘羅様まで足を延ばしているが、今回の展示は伊勢までの行程を紹介した。

そして、旅にかかった費用も気になるところだが、平林仁野右衛門の記録は貸し借りの出し入れまで記録されていて複雑なので、『豊科町誌』民俗・水利編「鳥羽家文書」で見ておこう。1733（享保18）年から1758（宝暦８）年まで上鳥羽村の庄屋を務めた本山三郎兵衛の記録として、伊勢に参った折の費用が以下のように記録されている。メンバーは成相組・田沢組の29人である。伊勢参りの主たる目的は伊勢の内外宮にお参りし、太太神楽を奉納することが一番の目的であったので、それに支払う料金が一番大きい。あいの山は伊勢神宮近くにあった遊郭で、寺社参詣の後はこうした花街で遊ぶことも一つの楽しみであった。

目録之覚
金二十七両　　神楽料納
　　金弐分　　料理人衆
金弐両　　まき銭
　　金壱分　　あいの山へ
金弐分　　御内室様へ
　　金四両弐分　　坊　　入
金弐両弐分　　中村武右衛門殿へ
金壱分　　同　金六殿へ
　　〆　三十九両
金壱分　　同　市右衛門殿へ
　　正月二十一日
金壱分　　村田半右衛門殿へ
　　外に
金壱両　　御はたらき衆中へ
　　金壱両弐分　　正月十五日晩　伊勢にて
　　三郎右衛門出し
　　惣講中之内　八百二十文
　　五郎八借り置
　　内　五百五十八文
　　三郎兵衛ノ所に有

こうした費用は「神田」「伊勢免」などとよばれる講で共有する田んぼから上がる米などを売った金をあてたり、積み立てたりしていたものであった。

２　安曇野を訪れた旅人

２－１菅江真澄の安曇野

菅江真澄という人　宝暦４年（1754年）－文政12月19日（1829年８月18日）。三河の出身といわれているが、生年を含めたその詳細はまだわかっていない。本名は白井秀雄、幼名は英二。菅江真澄の名は1807（文化10）年『氷魚の村君』（ひおのむらぎみ）が初出である。その名の由来も不明である。

郷里を捨て旅に出て再び帰ることがなかったその理由も、定かではない。故郷で問題を起こしたのだろう、といった推測もされているが、その真実もわかっていない。

長旅に出る　1783（天明３）年、真澄は本格的な長旅に出るが、そのきっかけも定かではない。自分がもち合わせている本草学・国学・漢方などの知識をもって、日本各地の習慣・風土・宗教など現在の民俗学や文化人類学に近い調査をしたかったのではないかと思われる。各地で描いているスケッチなどは、伊那の民俗学者向山雅重のスケッチなどに共通する細部まで詳細に観察している「眼」を見ることができる。また、見聞きした習俗も各地で興味深い記述を残している。今回の企画展では安曇野にかかわる部分の「伊那の中路」「くめじの橋」を中心に扱ったが、天明２年の旅の記述には非常に興味深い記述がみられる。「信濃のおんたけのほとり」での聞き取りである。

> もし、そこの子供らで天然痘を病むものがあると、近い山にその子供をつれて行って捨ておいてくる。すると乞食が集まってきて養ってくれる。やがて病気がなおると、その子供の家までおくりとどけてくれるが、その家では乞食にお礼をやるという習わしがあった。また、おなじところで疫病にかかった人があると、その家の周囲に垣根をして目がくしを作り、親類縁者でもけっしてこの囲いの中には入ってこなかった。

こうした伝染病に対する人々の意識や行為は、鈴木牧之（すずきぼくし）も『秋山紀行』の中ではしかにかかった子供を村はずれの小屋に隔離するということを書いているので、当時の疫病予防方法として、各地の村で慣習として行れていたことと推察できる。

安曇野への旅　1783（天明３）年長旅に出た真澄は三河の国から飯田・飯嶌町・辰野・うとう峠を越え、本洗馬に落ち着く。本洗馬にほぼ一年近く滞在し、その間に最初の目的どおりあちこちの神社に参拝したり、催し物を見て歩いたりする。本洗馬では長興寺の洞月上人を訪ね、最初は次の目的地を目指すつもりでいたらしい。しかし、近くの医師可児永通が「我が家で旅の疲れをいやしなさい」とねんごろに言うので、１日・２日滞在しようとおもっていたところ、ついつい長逗留になって知り合いや気心の知れた人たちもでき、別れがたくなった、といっている。しかし、別れがたい思いを断ち切り、天明４年の７月、本洗馬を出発して松本へと向かう。特に親しくしていた家の政員（まさかず）が松本まで送って、別れを惜しむ。

松本に11日まで滞在し、滞在中に薄宮（すすきのみや）や兎川寺（とせんじ）にもうでたり、七夕の飾りをするのをみて本洗

『真澄』№33　秋田県立博物館菅江真澄資料センター平成28年３月18日による。

馬での七夕を思い出したりし、わりあい寛いだ日々を湯の原（筑摩の湯）で過ごしている。12日良い道連れがあったので、あわただしく松本を出発し、田沢村に入る。

田沢村では村長の輩好の家を訪ね宿泊する。翌13日も輩好にすすめられるままに輩好宅に宿泊する。この日は迎え盆である。白樺という木の皮をたいまつに焚いて、男女、幼い子どもまで並んで数珠をすりならし、遠い祖先と亡き御霊の戒名を読み上げて拝み、弥陀の念仏を唱える、という習俗を見学している。火が消えると「南無釈迦如来」と唱えつつ踊りを踊ったというから、現在の迎え火とはちょっと異なるやり方で亡き御霊を迎えていたことがわかる。あるいは、13日の夜から盆踊りのようなものが行われていたのかもしれない。

そして、ここでは木曽川（奈良井川のこと）・梓川が一つになって犀川になること、昔はこの犀川で初鮭を３匹とって、島立のいさごだ神社・田沢のお社・穂高神社にそれぞれ１匹ずつお供えしていたこと、昔はいさごだの神社付近まで鮭が上ってきたことなどを聞き取っている。また、この日には姨捨の月を見に行った（「わがこころ」）ときに出会った自習庵の主が訪ねてきて、このあたりのみるべきところとして藤橋、渡蟻落（現在の渡波離橋）、水内滝などを紹介する。執田光（しぶたみ）というところには油の出るところがあるそうな、などといった世間話などもしているが、真澄はそれをきちんと書き留めている。

14日、いよいよ穂高神社に向かう。光の渡しに向かったが、行ってみると昨年の洪水で流されてしまったといい、熊倉まで戻って、犀川を越える。細萱村を経て穂高神社に到着するが、穂高神社の御神は瓊瓊杵尊であると、まず神名をきちんと確認している。そして穂高神社の周囲の様子を、木立の高く茂る宮どころで、四方は田面の穂波が重く垂れて豊かに見渡せる、と記述している。豊かな穂波を見て、昨年までの凶作でコメの値段が上がり人々が苦しんでいたが、今年はコメの値段が半分くらいになってよかった、という感想とともに稲がいつもこのように実ってくれれば、どんなにかいいだろうとの願いも込めた記述をしている。

穂高神社から高瀬川を越えて池田の宿を目指すが、真澄の左手には川会神社が、そしてそのはるか向こうには鶏放が岳（有明山）が見えていた。その奥には中房の湯や久曽湯（葛温泉）という良い温泉が湧くところがある、といっている。このころ、中房温泉も葛温泉もすでに人々の湯治場として、世に知られる場所となっていたであろうことが想像できる。

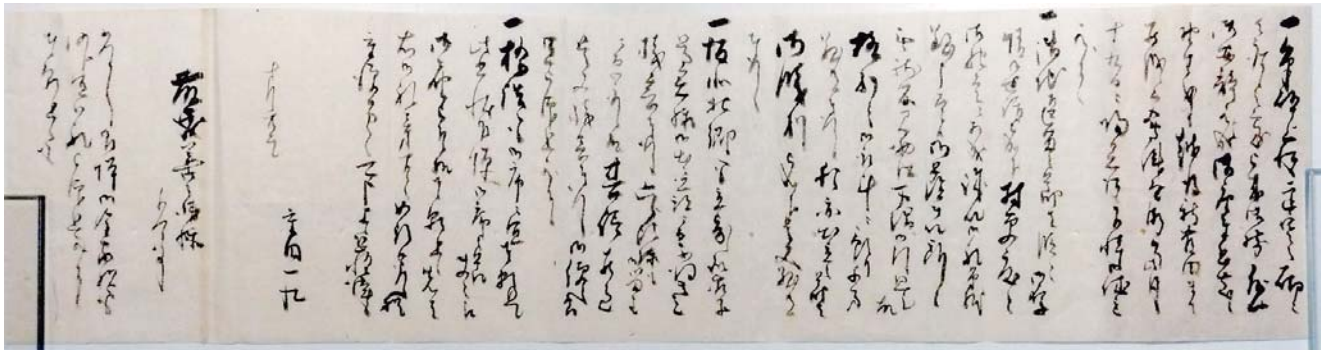
15日、自習庵の主から聞いていた「とありおとし」を訪ねようと、案内人を頼んでとあり落としに向かう。いざ、とありおとしにつくと、その谷の深さにまず驚かされ、龍がわだかまるような橋が二本掛けてあるところを渡り始めたが、案内人に手を引かれながらも半分までも行くことができず、身に冷や汗をかいて引き返したという。現在の渡波離橋からはとても想像できないが、木を渡したようなだけの橋ではやはり足がすくんで前に進めなかったのであろうことは容易に想像できる。あるいは、真澄は高所恐怖症だったか。

16日、お斎日で宮城のお不動様にお参りに行く人々でにぎわう池田を後に、大町へと向かう。曽根原の橋よりこちらは矢原庄、向こうは仁科といった村境なども意識して記述している。行く行く村雨が過ぎた後の空がきれいだとか、お斎日だから乞食がたくさん行きかっているといった、道々で印象に残ったことも記述し、やがて大町から女犬原・左右むらをぬけて安曇の地を後にする。高志の国に入ってもなお

「高志ながら　夢は山路をみすずかる　信濃の真弓　こころひかれて」と読んだぐらいに、信濃の国の印象は強かったようだ。

２－２　十返舎一九の安曇野

一九の生い立ち　　菅江真澄に遅れることおよそ10年、十返舎一九は1765（明和２）年現在の静岡市に生まれる。本名は重田貞一（さだかつ）。幼名は市九（いちく）といい、十返舎一九はこの名前からとったといわれている。1831年（天保２）年没。1814（文化11）年７月30日　松本の出版業者高美甚左衛門の招きで、木曽路より善光寺道の現地踏査のため、板木師花垣を連れて松本を訪れる。



十返舎一九が藤森親方に宛てた礼状

1814（文化11）年８月11日、甚左衛門の案内で、花垣と共に安曇地方を訪れ、豊科成相新田村の藤森善兵衛宅に一泊する。翌日、栗尾満願寺に参詣し、そこに十日間程滞在し、「栗尾観音・松尾薬師・宮城不動」の三霊場を含む、北アルプス山麓を取材する。

1814（文化11）年８月28日　　満願寺の隠居が同道して、松本（高美屋）を出立し、糸魚川（千国）街道で大町へ行く。

1816（文化13）年　　「続膝栗毛　八編　従木曽路善光寺道」（本山より大町）を刊行する。同書で、成相新田・池田・保高（穂高）・有明山・小岩嶽・栗尾山観音・松尾寺薬師・宮城不動など、安曇野地域を広く紹介する。

『続膝栗毛』の成立　　『続膝栗毛』八編序は「諏訪の湖波しづかに風越の峯枝ならさず」と書き起こす。往来の旅人が命をからむ蔦かづらと詠まれた木曽の桟（かけはし）も難なく越えることができるといい、木曽の名物の於六櫛、熊のゐ、寝覚の蕎麦、福島の奇応丸などが名物として記述されている。洗馬の駅から糸魚川街道にでて、栗尾・松尾・宮城などの霊場を経て稲荷山に至るが、その山深き場所でみたことを江戸に持ち帰り、ありのままに此の編の趣向とした、と記している。

しかし、実際にはありのままではなく、やはり戯作者としての十返舎一九が作話したものであることはいうまでもない。主人公の弥次さん喜多さんは相変わらずの「おとぼけぶり」で旅は進む。松本城下をたってしばらくすると成相の医者と一緒になる。この医者が自分もちょうど用事があって満願寺という霊場に行くからと、一緒にお参りに行くことを勧める。お気楽な旅の二人は、医者の母親の営む茶屋で腹ごしらえをし、満願寺に向かう。満願寺ではちょうど庫裏が修理中で、隠居所に泊めてもらうが、隠居様が大切にしまってあったまんじゅうを食べてしまったり。

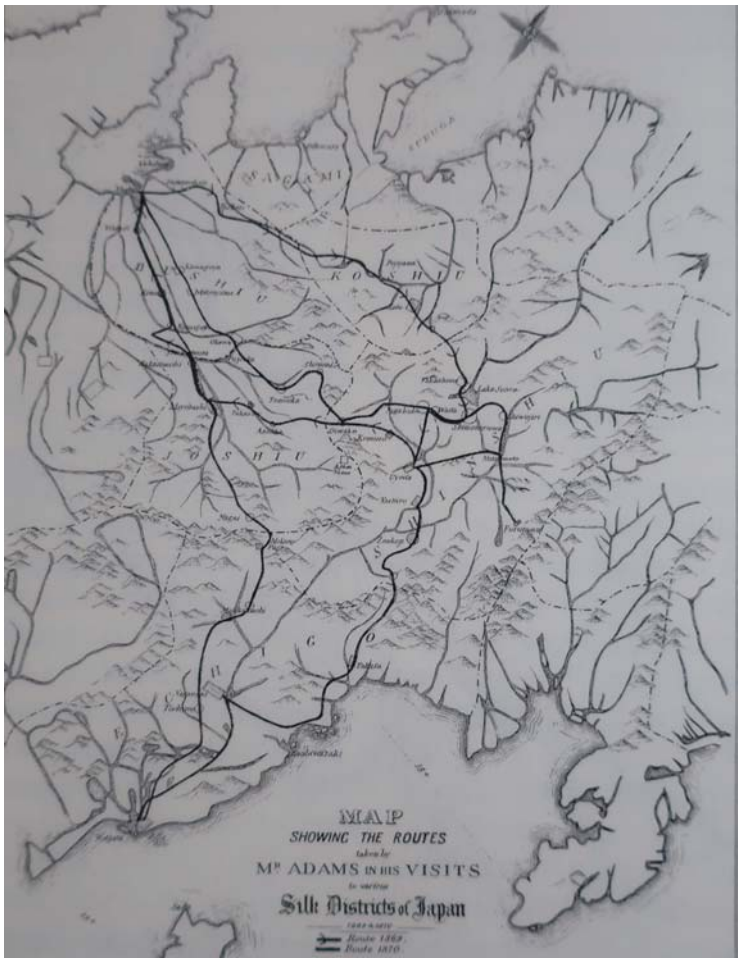
そして、満願寺から松尾寺を通り、宮城のお不動様にお参りに行く。ところがお不動様の近くの茶店で、とんでもないことをしでかす。

今回の展示ではその場面を紹介することにするが、方言などによるものの名前の違い、習俗の違いなどは、現在でも気をつけないと誤解を招きやすいし、問題を起こすことにつながりかねないことがよく分かる。とくに外国に行ったときには、注意が必要である。弥次さん喜多さんの道中記、まさに江戸っ子の二人が江戸とは異なる言葉や習俗のある国々を回るので、現在、わたしたちが外国に行くのと同じことである。そんなことを今回の展示から読み取っていただければと思う。

十返舎一九は『続膝栗毛』を書くために安曇野にやってきて、藤森親方（善兵衛）の家に宿泊しており、帰郷してからこの宿泊に対して礼状を出している。また、物語の中の十返舎一九の絵には、取材でおせわになった藤森善兵衛・高美甚左衛門の歌が添えらているが、その歌が状況をわかりやすくしている部分もある。また、絵は俳画風の絵で特に人物の顔の表情に特色があるといえよう。

３　安曇野を訪れたはじめての外国人
～イギリス人Ｆ・Ｏ・アダムズの旅～

安曇野を訪れた初めての外国人は、たぶん、イギリス公使館一等書記官Ｆ・Ｏ・アダムズ一行ではないだろうか。養蚕の視察に全国を歩く中の一環であるが、安曇野を訪れた目的は家蚕の視察ではなく、有明地方を中心に飼われている天蚕の飼育状況の視察であった。澄んだ緑色の糸を吐きだす天蚕は、当時の日本にとって家蚕とともに海外向けの輸出品として注目される生糸であった。もちろん、アダムズ一行は安曇野のみを視察するわけではなく、秩父・群馬などを視察しながら和田峠を越えて松本に到着した。江戸を出発するときには「馬で」と記述しているので、馬を使っての旅だったことは確かだが、通し馬だったのか宿（しゅく）で馬を変えたのかは不明である。松本では、松本藩士の付き添いを得て、総勢29人の旅であった（『穂高町誌』）。



アダムズの行程を記した地図
（富岡製糸場総合研究センター報告書『日本国の養蚕に関するイギリス公使館書記官アダムズによる報告書』）

古厩の Mokuzaemon、新屋の Tozaemon、立足の Benjiro 天蚕についての説明をしている。この３人はいずれもそれぞれのムラの首長という立場で、この役割を引き受けたものと思われる。役目上引き受けた仕事だったが、アダムズによれば３人の説明は非常に的を射た過不足のないものであったという。1870年６月17日に有明に到着し、天蚕の飼育場である有明の正真院原（しょうしんいんばら）といわれるクヌギ林を見学している。アダムズ一行のその様子は、同行した画家のチャールズ・ワーグマンによってスケッチが残されている（写真）。このスケッチは軸装にされて個人の家で大切に保管されている。

この一行は Mokuzaemon をはじめとする首長の家々に分宿したものと思われるが、残念ながら外国人の客をもてなすためにどんな料理を準備したかの資料などはまだ見つかっていない。ただ、アダムズ一行は３人の案内や説明に感謝の意を表するために、帰る日の前夜に和食と洋食を取り混ぜた食事を提供している。ということは、道中のある程度の食材などは持参していたものか、あるいは地元で調達したもので調理をしたのかなど、初めての外国人と接した有明の人々の様子を知りたいものである。当時の様子が語り継がれていたら、是非情報を寄せていただきたい。

チャールズ・ワーグマン画。天蚕視察の図（個人蔵）

アダムズ一行はいったん松本に出て、上田、新潟へと向かい、江戸に帰り着いたのは７月14日のことであった。これからおよそ10年後にイザベラ・バードが通訳の伊藤をつれて江戸を発ち旅をした様子が『日本奥地紀行』に詳しく書かれている。ムラムラでの宿泊は蚤との戦いであったことや、

行く先々で物珍しそうな人々が「外国人」を見物に押しかけてきたこと、各地で日本の習俗を体験したことなど記述されているが、アダムズ一行も公の旅とはいえ同様の体験をしていたのではないかと推測される。日本人以外の国の人をみた安曇野の人々は、どんな反応をしたのであろうか。興味は尽きない。

４　旅の土産

さて、今回のもう一つのテーマである「土産物」。江戸時代の人々はどんなものを土産にしたのであろうか。十返舎一九は木曽の名物として於六櫛、熊のゐ、寝覚の蕎麦、福島の奇応丸などをあげているが、こうしたものを土産にしたという直接の記述はみられない。ただ鉄道などができるまでは、土産物も自分の手で運ばなければならないので、名物でかさばらないものは土産としてももてはやされた。一九があげているお六ぐしなども、軽くかさばらず絶好の土産物になったではないかと思われる。また、穂高の上條家で保管していた資料の中には、親子三代で諸国を巡った際の土産物として持ち帰った名所案内の地図などがたまってきたので、軸として仕立てたというものが残されている。「近江国湖水一覧」など計４点であるが、一点一点は紙であるから、なるほど持ち帰るのにはいい土産物になったに違いない。持ち帰ってからも、これを見ながらここはどうだった、ここはどうだったなど、話も弾んだことだろうし、こうして後世に残る資料ともなっている。

こうした名所図会のようなものが、コンパクトにまとめられると絵ハガキとなる。記念に保管するもよし、郵便はがきとして出すもよし、利用度は高い。絵葉書は現在でも利用度の高い土産物の一つであろう。安曇野をスケッチした絵葉書などは土産物としても喜ばれるし、葉書としていただいてもうれしい。

そして高度経済成長期以降、旅も日本国内にとどまらず、海外へと出て行く旅も多くなった。安曇野で

九州から高野山までと大和廻りの伊勢参り・京三条大橋までの道のり附地図

土産物としての絵葉書

もJAのツアーでどこそこに行ってきた、などと海外の地名を口にする話をよく耳にするようになった。人によっては「いったいどれだけ歩いているの？」と思うほど、世界各地を歩いてきた人もいる。もちろん、JAのみでなく様々な旅行社が格安ツアーなどを企画して、新聞などの広告にもさまざまな土地への旅行情報が掲載される。当然、旅行に行ってきた人はお土産を買ってくるが、提灯・ペナント・こけし、饅頭など決まりきったものから、世界の珍しいものを買ってくるようになった。ワイキキビーチなどの写真で箱がコーディネートされたチョコレートなどはハワイの代表的な土産物である。親しいお酒好きの人には、国内ではなかなか手に入らないウィスキーなどを土産にすることもあった。国の豊かさの程度を知る機会でもあったし、海外への憧れを募らせるきっかけともなった。土産物としてかさばらず、利用価値の高いものとしてはマグネットなどがあろう。代表的な観光地の写真などで作られたり、有名な遺跡などの写真で作られたものもある。今回展示している土産物の数々を見ていると、安曇野在住の人々の旅が世界各地へ広がっていることがわかる。

マグネット

（倉石あつ子）

戦前、安曇野観光と信濃鉄道

信濃鉄道株式会社は1912年（明治45）に設立され、ほぼ一年半で松本駅から大町駅までの35．１kmを開通させた。1937年（昭和12）に国有化され大糸線となる。私鉄は国有鉄道とちがい、多くの乗客や貨物を載せて利潤を求める必要がある。ターゲットとするのは、江戸時代から続く寺社参詣、霊場巡りの客、次は湯治客である。さらに鉄道は、そのスピードを利用して多くの沿線スポットの遊覧が可能になるため、その魅力の発信に力を入れる。信濃鉄道も例外ではない。何を発信したのだろう。

１　始まった登山ブーム

（１）『日本アルプス案内』の刊行

開通前後の1916年（大正５）６月１日、信濃鉄道は小冊子『信濃鉄道案内』を刊行する。前半は、江戸時代の名所案内のように駅ごとに名所旧跡・特産物を紹介する。中萱駅は熊野神社、義民嘉助墓、柏矢町の萬水川の蛍、穂高駅の穂高神社、梨子と山葵、有明駅の有明山神社、宮城登山口など。沿線地図に、卍栗尾、有明神社、中房温泉が目立つように示される。後半は「日本アルプス案内」である。

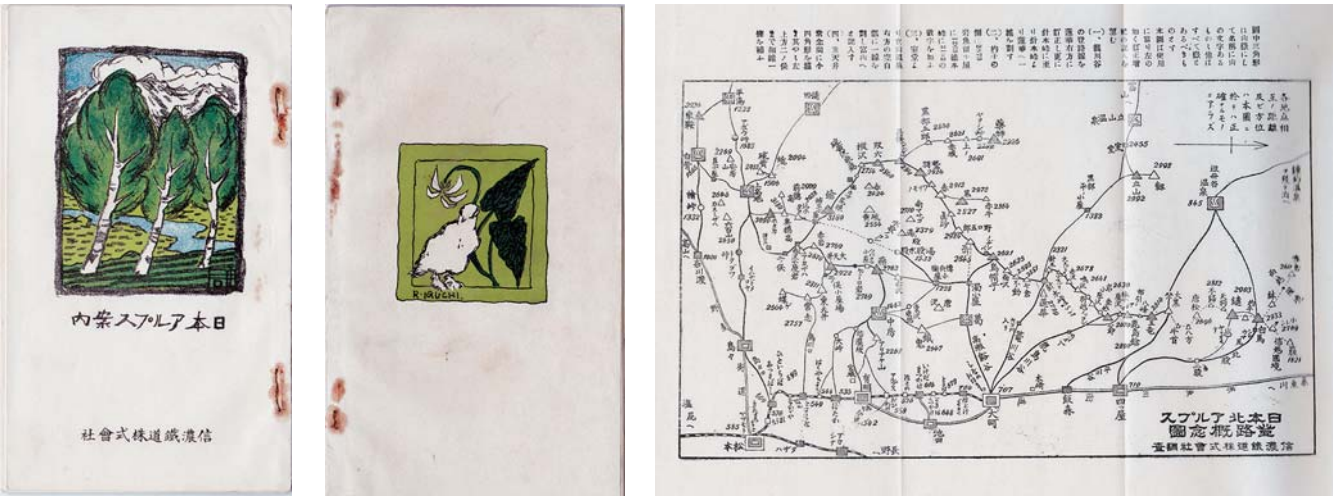
北アルプス登山は、明治20年代まで測量や地理的、植物調査など、ある意味「探検」を目的とした。1892年（明治25）、ウォルター・ウェストンの槍ヶ岳登頂により、楽しむための登山が始まる。その後、明治時代末から大正時代にかけて、登山者が増加し、大正時代中期の好景気は登山熱を高める。

信濃鉄道はこの動きに敏感に反応し、1917年に小冊子『信濃鉄道案内』の後半部を、小冊子『日本アルプス案内』として頒布する。表紙は小冊子『信濃鉄道案内』に使用したの画家井口良一の絵で飾る。緒言で、信濃鉄道は日本アルプスの山麓に沿い登山口である信濃大町駅、有明駅を有し、「日本アルプス」鉄道と呼ばれると、意気込みを伝える。内容は、北アルプス開拓の先駆者といわれる百瀬慎太郎に指導を受け、山々の紹介、持ち物から心得までを登山雑事として記す。高山植物はその権威で当時長野高等女学校校長の河野齢蔵の協力を得る。薄いながらも本格的な日本アルプスの案内書である。

なお、付された「日本アルプス登路概念図」は、北アルプスを描くが、下部の路線図が面白い。中心に大町を描き登山のベース基地であることを主張する。松本駅と大町駅が大きく、続いて有明駅を強調する。安曇地方随一の温泉、中房温泉の入り口、そして登山口であることを目立たせている。

（２）　登山客を呼ぶための取り組み

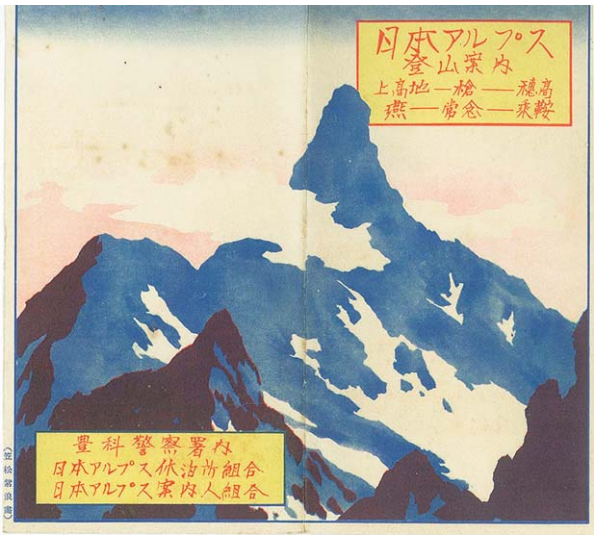
大正時代、好景気により農業国から工業国に変化し、工場労働者が増加する。その中から、経済的、時間的に余裕のある、家族という単位で休日を観光で過ごす人々が登場した。登山ブームはざらに加速する。



日本アルプス案内　1917年　信濃鉄道株式会社（長野県立歴史館蔵）

加えて、大町以北にスキー場開設により、スキー客も鉄道を利用するようになる。鉄道省も、登山・スキーブームに乗り遅れまいと誘客に努める。1931年（昭和６）に大阪鉄道管理局が発行した『”山への案内”』のはしがきに「登山と云えば直ちに槍、穂高、白馬を連想するように、山はなんと言っても今北アルプスが人気の焦点であります、それで鉄道に於きましても登山家大衆のために一般的なコースを選んで割引券を発売することになりました。……」と記す。登山路略図、登山コースを紹介して、信濃鉄道との接続がわかる神戸駅発の時刻表、そして料金を表示する。

“山”への案内　1931 年
大阪鉄道管理局
（長野県立歴史館蔵）



日本アルプス登山案内　1932 年　日本アルプス休泊所組合・日本アルプス案内人組合（長野県立歴史館蔵）

日本アルプス大瀧山へ!!　戦前　大瀧小屋経営　中村喜代三郎（長野県立歴史館蔵）

初期の近代登山は、道案内とともに荷物を運搬する必要もあり、小林喜作などのベテランの猟師が案内人を務めた。登山者の増加にともない大町市の百瀬慎太郎は大町案内人組合を、南安曇郡内にも有明口・烏川口・木沢烏川口案内人組合が結成される。しかし登山客の増加に案内人の確保は追いつかない。そこで案内人の技量向上を目的に、郡内の組合を統一して豊科警察署長を組合長に日本アルプス案内人組合を設立した。『日本アルプス登山案内』は日本アルプス休泊所組合・日本アルプス案内人組合の1932年のパンフレットである。笠松紫浪の槍ヶ岳をデザインした表紙、裏面に登山道と山小屋の略図がはいる。続いて、鉄道・

乗り合いバスの最寄り駅から登山口の料金、山小屋・旅館の宿泊料がのっている。ちなみに常念小屋は一泊２円、弁当20銭で、案内料は２円とある。登山口別にいくつかのコースと料金が提示されている。烏川口の案内人の詰め所が、豊科駅前の「豊科バー」というのが面白い。

山小屋も整備が進む。大瀧小屋のパンフレット『日本アルプス　大瀧山へ!!』がある。概説に「日本山谷の風光は日本アルプスに大成し、日本アルプスの精粋は上高地に縮写され上高地の展望美は大瀧山頂を局地とする」と入り、「大瀧山ヒッテより展望」「大瀧山登山口」の説明、登山ルート図がつけられる。最後に、宿泊二円二十銭、弁当三十銭、「ビール、サイダー、菓子、副食物、エハガキ、写真各種」とある。

２　多くの観光客を信州に

1929年（昭和４）にはじまる世界大恐慌は、アメリカの絹需要を急激に減退させる。全面的にアメリカ市場に依存していた日本の製糸業は大きな打撃を受けた。養蚕経営の農家ばかりではなく、蚕糸業に依存していた地域全体が大きな影響を受け、社会不安をひきおこした。

1934（昭和９）、長野県は県下の観光団体を集めて長野県観光協会を設立する。その趣意書に「由来信州ハ蚕糸王国ヲ以テ自負シテ居ツタ、併シ今ハ夫レノミデ安ズルコトハデキナイ、此ノ天与ノ資源ヲ開発シ利用シ以テ蚕糸ト共二景勝王国ノ実ヲ挙ゲ県民ノ福利ヲ増進セネバナラナイ、……」とある。落ち目になった蚕糸業に代わり、自然資源を活かした観光推進を図ろうと、長野県も重い腰を上げたのである。長野県観光協会は、1935年に江戸時代以来の温泉、旧跡・名勝を中心とするパンフレット『観光信州』を発行する。鳥瞰図の原画は、1932年に吉田初三郎が描いた全長４ｍをこえる『長野県の温泉と名勝』である。名勝や温泉の数により面積をさくため、長野県の形を大きくデフォルメして描く。安曇野市域は中房温泉、有明温泉だけで名勝・旧跡がない。山の名前もそれほど多く記載されない。裏面の名勝や旧跡の一覧表には、中部山岳国立公園北アルプスと中房温泉が載っているのみである。

中部山岳国立公園は1934年12月に指定される。国立公園制定は風景地の保護・開発を建前とするが、、外国人観光客を増やし日本経済を立て直す施策ともいわれる。1930年に鉄道省に国際観光局を設置し、官民一体となって国際リゾート地と宿泊施設の選定・設置が進められた。上高地帝国ホテルは長野県が建物を、経営は民間に委託というかたちで実現する。

３　パンフレット『信濃鉄道案内』と『中部山岳国立公園と信濃鉄道』

長野県内でも、大正末期から1937年前後まで、鳥瞰図が付された観光パンフレットが数多く刊行される。発行元は、鉄道会社、市町村などの自治体、観光協会などである。信濃鉄道株式会社関係では、現在のところ、『信濃鉄道案内』と『中部山岳国立公園と信濃鉄道』の二つが確認できる。

観光信州（パンフレット）に掲載の「長野県の温泉と名勝」吉田初三郎画　1935 年　長野県観光協会（長野県立歴史館蔵）

（1）　タイトル・構成・発行時期

裏面は写真と文字データである。『信濃鉄道案内』が表に表紙タイトル面ともに鳥瞰図が付く。『中部山岳国立公園と信濃鉄道』は表は鳥瞰図だけで裏面に表紙タイトル面がつく。そのため前者は字間が広く読みやすい反面、鳥瞰図は横が短い。表紙は、前者が山の絵、後者は燕岳の写真が使われている。刊行時期の記載はともにない。『信濃鉄道案内』は、おかめ前駅（1930年開業）、青島駅（1931年開業）、昭和駅（1935年開業）がなく、大糸南線（大町以北　鉄道省）は信濃森上駅（昭和７年開業）まで開通している。これらから、1933年頃の発行か。『中部山岳国立公園と信濃鉄道』は、昭和駅（1935年開業）がある。大糸南線は中土駅（19３年開業）までの開業である。さらに中部山岳国立公園指定が1934年。『中部山岳国立公園と信濃鉄道』は、1935年頃の発行か。また。信濃鉄道株式会社の解散記念に刊行された『信濃鉄道史』（1940年刊行）に添えられており、解散間近かの発行だった可能性が強い。発行者は、ともに記載はないがタイトルと内容から信濃鉄道株式会社であろう。

（2）文字と写真の情報（裏面）

上段に写真、下段に文章と構成は共通している。写真は『信濃鉄道案内』、が「松本城天守閣」「有明神社」「仏崎観世音」「木崎湖と夏季大学」「穂高岳」「槍ヶ岳」「燕岳」「白馬岳」の８葉、『中部山岳国立公園と信濃鉄道』は、表紙がついて紙幅が狭くなったせいか、「有明神社」「仏崎観世音」「穂高岳」がなくなり、代わりに「穂高神社」が入り６葉。「燕岳」「槍ヶ岳」の写真は変更されているが、他は同じ写真を

穂高岳　槍ヶ岳　燕岳　白馬岳

尖ゝ、風に荒ぶる山肌の勝劃相、アルプス銀座を通過の途上より見上ざる時中岳もきがい、中央線東恵駅附近より遥空する山姿に威厳と雄偉を感ぜざる人なからん。況んや一歩をこの山に踏みたる時は、貴ひ知れぬ敬と恐怖とが胸底に躍動するものありと謂せらるゝも亦必然なり。

◇槍ヶ岳　日本アルプス中の最高峰、霊然高三一八〇米、尖四三百尺、正しく槍の如く、直立天空を衝き、その目安三万に引くも、北西に走るものを西篠尾槍といい、三俣岳から分れて一は薬師・雲岳より立山に達し、他は鷲羽・鉢ノ木岳より遥かに日島に亘る。北東に走る東篠尾槍と云い、大天井・燕を起し、南は直ちに穂高連峰と相を接す。登山者は、上高地及中尉日（有明と云う）より梓川を渡り高瀬入り鷲羽・水俣又は鷲羽より登る。中尉日は所謂アルプス銀座を經て槍大町より登ることを得る。中尉日は所謂アルプス銀座と云はる、燕岳より大天井岳・西篠尾・東篠尾槍を經て槍尾山を渡り、一ノ俣・二ノ俣を渡り、槍沢から右に東沢山、左に槍尾山を望み見つゝ、更に半里の雪渓を横ぎりて登るものと三途よりする者多数を占む。途中高山植物に、雲の赤来に、心氣を旗舞しつゝ、峻嶮なる頂上に達して山頂に達すれば、廣き信濃の平野、遠く上州・甲州の諸峰を眺望し、眼下に高山植物を見て、一歩を踏み入れば、世界の俗塵を脱して、清涼の氣に浸るを得る。有明神社より一里半、宮城まで自動車の便あり。徒歩三里、中尉川の渓谷を上り、信濃坂を經て中尉温泉より頂上まで一里三十町。帰路少年も舞好く登ることを得られ、健脚者は下駄履きにて容易に頂上を極むることを得。高さ二七六三米。

◇常念岳　燕・大天井・東天井・槍ヶ岳と並稱して、常念山脈と云はれ、頂脈は前常念・後常念・燕常念の四峰に分れ、槍・穂高の高峰に対峙せつゝ、安筑の平野に雄姿を時々見せ、一ノ俣の霧の奇観を蔵す。常念温泉より五里半、八時間行程にして頂上に達す。中途里沙渡近り鉢木の便あり。高さ二七七五米。

◇白馬岳　しろうま岳と呼ぶ。高さ二九二三米、山容の美しさは、一に大蓮華山と稱へらるゝに依つても知る。信濃・越中・越後の三国に跨る。大雪渓・お花畑に名高く、且又眺望の絶大と登山の北仮的容易なることに、今や北アルプス登山の中心たり。信濃大町より東へ、四ツ谷を經て二俣まで自動車に依るものと、大糸南線に乗り換へ、信濃四ツ谷駅下車、二俣まで自動車、又は信濃森上駅下車徒歩に依るものとの便あり。近年は、白馬岳と加賀渓谷経由登山をなすものの比年共数を増す。四ツ谷より山頂まで四里半、九時間にして達し得。

◇針ノ木岳と五色ケ原　鉢者二八二一米は、白馬と並稱せらるゝ大雪渓を有し、五色はその高く険はしき高山植物の群落と花畑に依て有名たり。共に登山者の賞讃する所なり。

◇高山植物　北日本アルプスは大自然の博物教場として、発生する高山植物は、繁茂頗小なること、花色鮮麗なること、根の長大なること、多くは多年生たること等を特徴とし、品種に富めること本邦の第一位にあり。本邦産高山植物の品種にして、北アルプスに産せざるもの極めて少き故を以て、學界の世成者より重要視せらるゝ處なり。

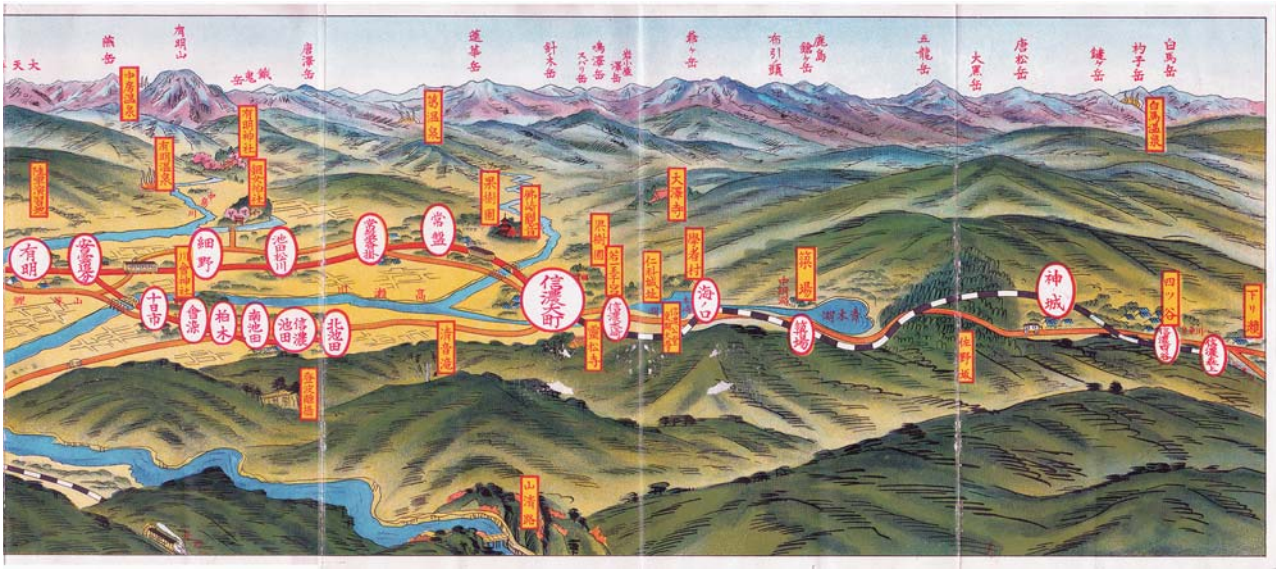
❀温　泉

◇中尉温泉　アルプス銀座の稱ある燕・上高地登山の玄關口にして、秀麗燕岳の麓、有明山の背面に位し、海抜五千四百尺、清河なる中尉川の渓流に臨み、俗塵を離れたる仙境にして、温泉湧出する清澄なる温泉は、療養所としても効あり。アルピニストの見休めとして共名を知られ、八百人を容る、大旅館あり。湯出量多きが故に、ブール其他各種の浴槽を備へ浴客に便せり。

◇嘉温泉　高瀬川の渓流に沿ふて、信濃大町駅より三里餘の上流にあり。馬蹄と亟里餘は自動車の便あり。槍ヶ岳登山者に徒路にして鳥帽子・燕岳登山の足がまりともなる處なり。山の温泉として泉質は炭酸泉なるが故傷も亦興趣に富み、原始的の風致を保へ、山麓の清爽なると、高瀬川清流に臨めることにより、春夏秋を通じての浴遊地として推賞せらる、處なり。

❀一般運輸の関係

常路道は上述の如く登山と温泉に通ずる處なるが、一般交通機関として、北松本・島内・梓橋・一日市場・中萱・豊科・柏矢町・穂高・有明・大糸南分・南田松川・澤・信濃大町の十二駅は、省線と連帯して旅客貨物の輸送絶あり、夏期登山、冬季スキー等の季節には、特別連帯割引等一般的に貨客の便に資する處多し。

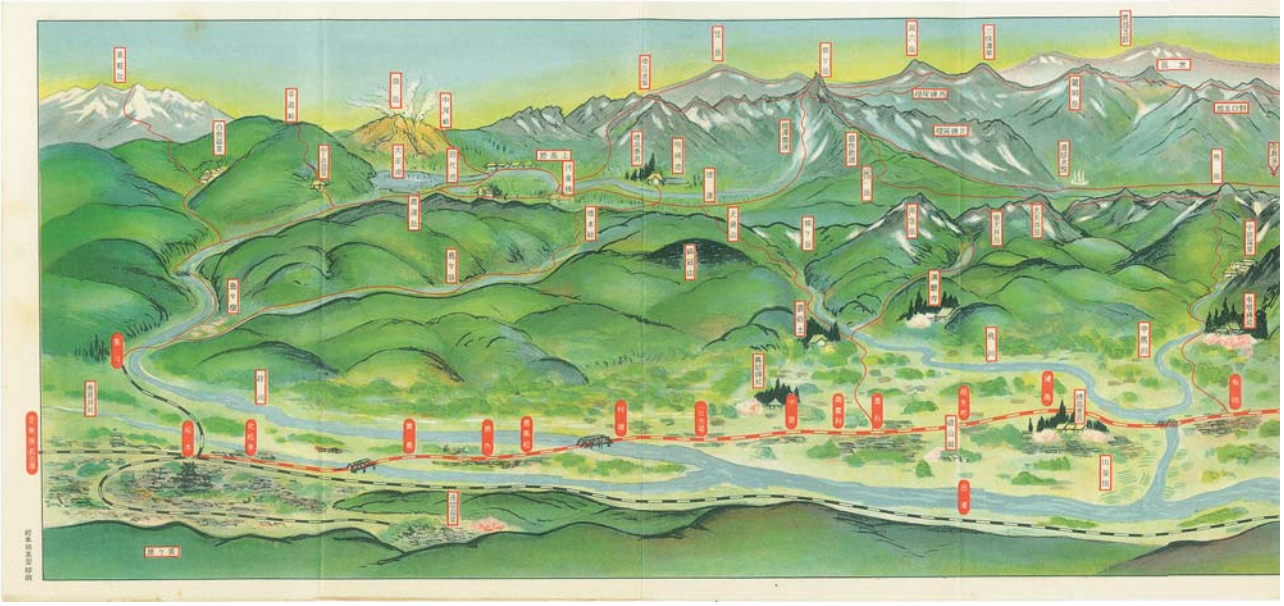


信濃鐵道案内　戦前　信濃鉄道株式会社？（長野県立歴史館蔵）　上段 表　下段 裏

使用する。

ともに「信濃鉄道沿線案内」のタイトルの後に概説が入る。『信濃鉄道案内』は、「中間の各駅にはアルピニストの憧憬する日本アルプス登山口を控へ、近く選定せらるべき国立公園日本アルプスの大玄関を占め、其秀麗なる高原風光を紹介する唯一の交通機関として……」と自らを紹介し、その後沿線を大きく四つに分けて説明する。まず「沿線の名所」は、松本市、豊科町、穂高町、有明駅、有明神社、おかめ様、仏崎観世音、大町、仁科三湖と小見出しを立て紹介する。特に有明駅は「信濃鉄道の開通に依りて新たに発展せる所」「常念の登山は当駅より」と紙幅をとり紹介するのが面白い。また寺社仏閣の紹介は、私鉄に特徴を表している。「おかめ様」と呼ばれる鈿女神社の参拝客の便を図るためおかめ前駅を昭和５年に開業している。次は「日本北アルプス」。飛騨山脈は、アルピニストの憧憬の的で、北は立山から南は御岳まで火山もあって興味は尽きないとし、穂高岳、槍ヶ岳、燕岳、常念岳、白馬岳、針ノ木岳と五色河原、高山植物という小見出しが付き解説が入る。次に「温泉」、中房温泉と葛温泉が紹介され、最後に「一般運輸の関係」として登山と遊覧に適するが一般交通機関としても充実していることを強調する。

『中部山岳国立公園と信濃鉄道』の解説は、『信濃鉄道案内』とほとんど変わらない。前段は、「中間の各駅に**登山熱の旺盛なる現代に於てその憧憬の中心となれる**日本アルプス登山口を控へ、**中部山岳国立公園**日本アルプスの大玄関を占め、其秀麗なる……」（ゴチックの部分変更）と、国立公園になったことを強調する。項目立ても「「日本北アルプス」を「**中部山岳国立公園**日本北アルプス」と変更している。1934年12月の国立公園指定にあわせて、小さな変更をしただけと思われる。

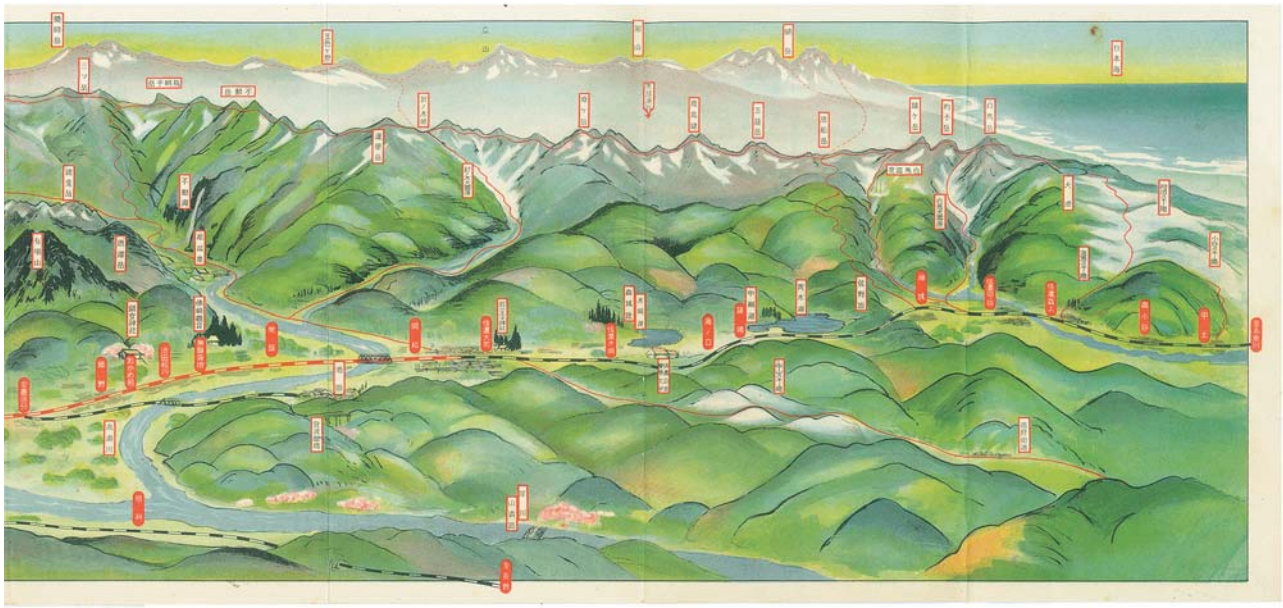


（3） 鳥瞰図（表面）

ともに作者はわからない。吉田初三郎や金子常光のような有名な作家ではない。

① 『信濃鉄道案内』

北アルプスは狭く、安曇野を大きく描く。上高地は、信濃鉄道沿線ではないためか、大きく描かれない。信濃鉄道をはじめ私鉄は朱線で描き、パンタグラフを強調した電車が描かれる。省線（鉄道省）は白黒線路マークで描かれ、蒸気機関車が走る。ただ信濃鉄道と大糸南線は、線路の表現は違うが、駅のそれは同じである。安曇追分駅から別れる池田鉄道も信濃鉄道と同じ表現で描かれる。電力供給をはじめ、一時は運営を委託するような密接な関係にあったためであろうか。名所・旧跡は、黄色のバックに朱で書かれている。安曇野市域をみると、寺社仏閣は、上野庚申、長尾観音、金竜寺観音、法蔵寺観音、玄蕃稲荷、穂高神社、栗尾満願寺、有明神社、鈿女神社、川合神社、仏崎観音、霊松寺、若一王子宮、大澤寺が、温泉は中房温泉、有明温泉、葛温泉が、名所・旧跡は小倉官林、室山、須砂渡（桜が描かれる）、中萱嘉助墓、陸軍演習地、登波離橋、山清路、清音滝、仏崎観音の横に果樹園、若一王子宮の横にも果樹園が書き込まれる。果樹園は、何を栽培したのだろう。そのほか、朱書きで細く、小倉官林の下に松茸、穂高川と犀川の合流部分に山葵、萬井の蛍、有明駅の近くに鯉と、名産品等が記される。寺社仏閣を多く紹介した参詣



中部山岳国立公園と信濃鐵道株式会社　戦前　信濃鉄道株式会社（長野県立歴史館蔵）　上段 表　下段 裏

鉄道の性格を残した鳥瞰図である。

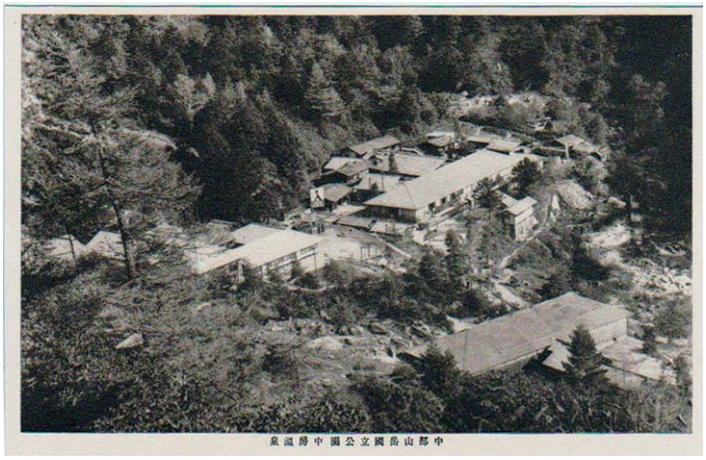
②　『中部山岳国立公園と信濃鉄道』

美しい色彩で、松本駅を左端に、県境の中土駅を右端におき、ほぼ中心に緑の有明山を描き、信濃鉄道ばかりではなく、国有化を見越していたように南・北安曇郡を描く。上部２／３は北アルプスを大きく描き、山々の位置関係もはっきりし、登山道を朱書きで入れる。やはり上高地を強調せず、中部山岳国立公園の山々全体を描いている。残念ながらこれらの山々を信濃鉄道沿線から望むことはできない。想像を膨らませた鳥瞰図である。河川の表現は、本来ならば高瀬川と合流する烏川と中房川が、大きく離れて描かれる。安曇野部分も東西が狭く、駅の間隔も適当である。これも北アルプスの表現に力が入ったためか。『信濃鉄道案内』と異なって、信濃鉄道のみ朱線で表現され、存在したすべての駅が描かれる。国有化後、青島駅はなくなり、おかめ前駅は北細野駅、池田松川駅が信濃松川駅、常磐沓掛駅が信濃常盤駅、昭和駅が南大町駅に変更になる。池田鉄道はポツンと池田駅のみがあるだけで、素っ気ない表現である。

山の注記は丁寧に入れられる。対して名所旧跡は『信濃鉄道案内』に比べ大きく減少している。ただ碌山館が入るが、現在の場所ではなく、生家のあった穂高町矢原付近である。この鳥瞰図は、タイトルにあるように国立公園の指定を記念しての作成かもしれない。

４　安曇野の名湯　中房温泉

江戸時代の『信府統記』に「中房山ノ奥二温泉アリ……」とあり、薬師堂を建て冬期間をのぞき入湯者で賑わっていた。1821年（文政４）、一日市場（安曇野市三郷）の百瀬茂三郎が明礬採取の際に温泉旅館を創業し利用者が増大する。さらに、大正時代の登山ブームは、中房温泉を燕・槍ヶ岳の登山口として発展させた。長野県観光協会が作成した絵葉書『夏の信州　第二号』の12枚の内、長野県内の温泉として中房温泉が紹介されている。



絵葉書　中部山岳国立公園中房温泉　戦前　長野県観光協会
（長野県立歴史館蔵）

このほか『信濃鉄道案内』に描かれた有明温泉がある。1921年に中房温泉近くから引湯して松尾寺付近まで運び、現在の鐘の鳴る丘資料館の建物を長野市から移築して営業を開始した。しかし引湯距離が長く温泉の温度が下がり休館状態になる。そのためか、『中部山岳国立公園と信濃鉄道』に描かれない。

おわりに

信濃鉄道株式会社は解散記念に『信濃鉄道史』（1940年）を刊行する。その中で、「後年頃に登山熱の勃興と其の盛況を観るに至ったのは、時勢の力でもあるが、本社鉄道の利便と宣伝鼓吹が與って力あった」、「最近松本駅の登山者の数を観るに、昭和十年には二万七千を算し、翌十一年には三万を超過するに至った。二十年前を回顧すれば今昔の感に堪えないものがある」と登山ブームへの貢献を自負し結んでいる。北アルプスの素晴らしさはもちろん、近代登山の普及のために、登山道や山小屋の整備、登山基地としての中房温泉の整備、山案内人組合の設立など、多くの努力があった。信濃鉄道は、さまざまな魅力の発信とともに、登山客を運ぶ手段としての役割を果たしたのである。

1937年、日中戦争が始まった。登山者は減るどころか増加を続ける。しかしそれはレジャーではなく「健康報国」のスローガンに代表される、山登りを通した体力増進や精神鍛錬を目的とした。昭和18年以降になると、山小屋は閉鎖され登山者はめっきり減ってしまう。

戦後の経済復興によって、大糸線沿線の観光は大きな花を咲かせる。安曇野市域も多くの観光客が温泉・保養、そして自然景観を目的にやってきている。しかし、交通手段は、高速道路網の整備によって自動車が８割を占め、鉄道の比率は低下した。近年は、長野新幹線の開通により大町以北への入り口は長野駅に変わりつつある。今後は、安曇野の魅力を、どのように、だれに発信すればよいのでしょうか。

（原　明芳）

みなさまへ

旅は、私たちにさまざまな文化の在り方を教えてくれる。国内・国外を問わず、自分の生活圏を出たらそこは異文化圏である。そうなると旅に出ることによってさまざまな文化の存在を知り、知ることによって異文化との付き合い方や理解の仕方の難しさも教えてもらうことになる。これからの若い人たちはさまざまな国の人々と付き合い、文化の違いを認識しつつそれを受け入れ、また、自分も主張していかねばならない。自分と異なることを「おかしい」と片付けてしまうのではなく、それを理解するためにどうしたらよいかを考えるきっかけとしてこの展示を活かしていただければ幸いである。

「ふるさと安曇野　きのう　きょう　あしたNo.21」
編　集　安曇野市豊科郷土博物館
発行日　令和２年２月15日

安曇野市豊科郷土博物館
〒399-8205長野県安曇野市豊科4289-８
TEL：0263-72-5672　/　FAX：0263-72-7772
URL：http://azuminohaku.jp/